

徒然草

東西の分水嶺：アラカン山脈の東と西

神田道男

ミャンマー日本・エコツーリズム理事

アラカン山脈と言われて、その場所をすぐに思い浮かべる人は少ないと思われる。アの字で始まる山脈として思い出すのは、第一にアルプス山脈、地中海とヨーロッパ中央を隔てる壁である。カルタゴのハンニバルやフランスのナポレオンのアルプス越えを思い出す。アメリカ合衆国東部のアパラチヤ山脈や、モロッコの南、サハラ砂漠との境をなすアトラス山脈などを思出す人もいるであろう。アラカン山脈は、アジアにあってミャンマーとバングラデシュの間を南北に隔てる最高高度 3800m、長さ 3000Km の大山脈である。

今まで、国際協力で世界中を飛び回ってきたが、その中でも東南アジアの島嶼部であるフィリピン、マレーシア、インドネシアなどが自分のフィールドと考えてきたので、大陸部アジアは不案内なことが多いが、最近では、ミャンマーやインドシナ諸国などを訪問する機会が増えた。昨年の 8 月にはベトナム、9 月から 10 月にカンボジアとバングラデシュと続けて出かける機会があった。島嶼部、大陸部を問わず東南アジアに共通するのは、同じようにモンスーン・アジアであり、水田稲作地帯であることだ。かつて、高瀬国雄さんが、大来佐武郎先生とともに、灌漑農業による「アジアの米倍增計画」を提唱したが、雨季の東南アジアを旅すると水田稲作地帯を実感する。大川一司先生が、「PINE を PALM に変えれば、日本の夏と東南アジアの風景は同じだ」と言われたのを思い出す。

バングラデシュはアラカン山脈の西側の国だが、モンスーン・アジアに属して水田稲作地帯であることは東南アジアと変わりはない。人口一人当たりの所得水準は、バングラデシュ、カンボジアの両国ともは 800-900 ドル/人で、同水準にあり大差はない。他方、人口はバングラデシュが 1 億 5 千万人とカンボジアの 10 倍である。面積はバングラデシュが約 15 万 k m²、カンボジアが 18 万 k m²と大差はないから人口密度の相違は相当なものだ。農村風景に共通点の多い両国だが、カンボジアからバングラデシュに移動して、文化の違いを実感した。カンボジアでは、首都のプノンペン、シェレムアップ、コンポンチャム、シアヌークビルと地方都市も訪れたが、泊まったホテルは中華系カンボジア人の経営が多く、シアヌークビルで予約したホテル「Golden Sand Hotel」に着いてみると「金沙飯店」と看板がかかっていた。このホテルのフロントは女子であったが、バングラのホテルでは男子ばかりであった。カンボジアからバングラに移動して、直感的に思ったのは、中国文化圏からインド文化圏に変わったなということである。タイからミャンマー、ベトナムからカンボジアへ移動では、なかった感覚の変化である。

この感覚の違いを文化的側面、文字、宗教、食事などから整理してみた。まず文字であるが、カンボジアでは、丸みを帯びたクメール語か漢字の看板を多く見たが、バングラデシュでは町の看板は、英語か四角張ったベンガル語の表示が多く漢字を見ることはなかった。実際には、文字の基本にサンスクリットなど共通の要素もあるのであろうが、外部者には違って見える。カンボジアのクメール文字はミャンマー語の様式に似ている感じがした。インドネシア語もサンスクリット系の文字であったが独立の際に、アルファベット表記に改めているので、外部者にはありがたい。ホテルでの面白い発見は、ホテルが配信するテレビ番組の選局で、両国のホテルとも60局ぐらいが設定されていたが、カンボジアではCNNなど西欧系の番組の他、中国、香港、台湾など中国語の選局が多く、バングラデシュでは、西欧系の番組の他、中国語はなく、ボリウwoodsの映画を含めインドの番組がとても多かった。イスラムのせいなのか、ASEAN だからか、インドネシアのメトロテレビも選ばれていて懐かしかった。こんなことから、文化圏が違うなと感じたのだと思う。

そんなことから、梅棹忠夫の書いたものに、西の国、東の国といったタイトルのものがあったことを思い出して読み返してみた。1967年に中央公論社から出版された単行本の「文明の生態史観」の中に、『東と西の間』が掲載されている。1955年5月から11月までのアフガニスタンとパキスタンにおける学術調査の帰途、アフガニスタンのカブールからパキスタンを通り、インド東部のベンガル地方のカルカッタまで車で移動した時の印象記で、1956年2月に書かれたものである。バングラデシュより西の国の「インド」とカンボジアより東の国の「日本」との比較を主体としたものであった（バングラデシュのパキスタンからの独立は1972年であるからこの本にはバングラデシュは出てこない）。梅棹は、『東と西の間』において、インドを東洋と西洋の間にある「中洋」と位置づけ、西洋、東洋としての日本、中洋としてのインドを比較して、アジアの多様性、日本の特殊性を指摘している。これらの考えを整理して1957年の中央公論2月号発表したのが『文明の生態史観』という関係になる。

『東と西の間』では、官僚、植民地と英語、中華思想と辺境民族、美と宗教、近代化の条件などの気になる項目が並んでいる。政府開発援助にとって官僚は重要な要素である。ベトナム、カンボジア、ミャンマー、バングラデシュで官僚に会って話を聞く機会も多くあったが、個々の官僚とは別に官僚制度という点では、バングラデシュが複雑な仕組みを運用しているように思われた。この違いは、英国の植民地とフランスの植民地と宗主国が異なったことと関係があるのか、それともよりそれぞれの地域の歴史的なものか。ミャンマーが植民地になったのは1890年代と遅く、初期はインド植民地の一部として統治されていた歴史があるので、ミャンマーを知ることで何か回答が得られるかもしれない。

カンボジアでは、プノンペンの街でも、コンポンチャムに行く道でも立派なお寺をたくさん見ることができ仏教の国を実感することができる。ベトナムのハノイにもお寺はあるが、仏教という感じはあまりしない。バングラデシュの隣国であるミャンマー

のヤンゴンの街はシェダゴンパゴダの門前町でもあるように、早朝の坊さんの托鉢にみられるように、どこに行っても仏教が生活に組み込まれていることを実感できる。他方、バングラデシュはイスラムだから 5 時頃にはお祈りが聞こえてくる。しかし、ダッカの街中でも、ダッカから東北へ向かうマイメーシンへの道でも目立ったモスクは見かけなかった。10年ほど前に、しばらく住んだインドネシアの方が、経済成長を続けているせいかもしれないが、立派なモスクも多く、マイクの音量も高かった記憶がある。

10月の初旬であったが、ちょうどイスラムの祭りの日が近づいていた。その祭りでは、牛やヤギを屠殺して、肉を貧しい人や親族に配る習慣になっているとのことで、町はずれに牛市が立ち、ダッカ市内では牛が道端につながれ、買いに来る人を待っている状況が見られた。円借を含む外国借款で出来た鉄道併用橋で距離 4800m のジャムナ橋からダッカへ続く道路は牛を満載したトラックであふれ、たくさんの牛がインドから輸送されていた。バングラデシュでは、宗教は違うとはいえ、インドの影響が大きくインドを抜きには考えられないように思われた。

最後に食事である。カンボジアの町のレストランでは、カンボジア料理、ベトナム料理、タイ料理があまり明確な区分なしにメニューに載っていたように感じた。プノンペンの中央市場の近くには、漢字の看板を掲げた中華料理店も数多く、昔よく訪れたタイのバンコクの雰囲気が出された。バングラでは一変して、よく探さないと中華料理店はない。宿泊したホテルのメニューは、インド料理、タイ料理、西洋料理の 3 種であった。稲作なのでご飯類はどこでも食べれるが、麺類がないのがバングラデシュであった。ミャンマーではモヒンガーというコメの麺を朝食に食べたりするがバングラでは麺を食べる習慣がないようである。「文明の生態史観」には、1958 年に書かれた『東南アジアとインド』というエッセイも所載されている。東南アジアのタイ、カンボジア、ベトナム、ラオスを旅行して、インドの影響について書いたものである。東南アジアにおけるインド要素として、文字、ナーガ、ガルーダ、ラーマ物語を挙げ、こうした古代インドの影響に比べ現代の影響の貧弱なことを嘆き、「うまい支那料理を食べた後では、現代の東南アジアにおいては、インド人はとうてい華僑の敵ではない」と結んでいる。

ミャンマーの西側、アラカン山脈がアジアの東と西の文化の分水嶺なのであろう。こう考えると、かつての日本軍のインパール作戦やミャンマーの現在の課題であるロヒンギャー問題の難しさが浮かび出てくる。